
アフターキング

佐井 識

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アフターキング

【Nコード】

N5824S

【作者名】

佐井 識

【あらすじ】

東南アジアの小国・ヴェイラの首都で、隠遁者のような生活を送るヒゲの男、ジェイル（32）。その正体は、15年前にわずか17歳で退位した最後の国王だった。

正体を隠しながら静かに暮らす彼のもとへ、突然日本人の女子大生チセがやってくる。ジャーナリスト志望のチセは、ジェイルを取材したいと言ってきて！？

パワフルで天然なチセに振り回されながらも、ジェイルは諦めていた人生を取り戻していく。だが背後では、彼を政変に巻き込もうと

する不穏な動きが……。

破天荒女子×俺様ナイーブ男子（年の差）。恋愛ありクーデターありの、ドタバタエンターテインメントになる予定です。

第1話：最後の国王（1）

少年はひとりで立っていた。最高評議会が行われている大議場の中央で、並んだ多くの臣下に、さらにはテレビカメラの向こうにいる何百万もの国民の瞳にみつめられながら、ひとりで立っていた。

宮殿内にある大議場には、赤い絨毯が敷き詰められている。ヴェイラ王国の国鳥であるクジャクの金のレリーフがあちこちに施され、爛々と光を反射していた。贅を尽くした内装は、かつてヴェイラ王国が、アジアでも一、二を争う黄金採掘国だった頃の名残を感じさせる。欧米列強によるインドシナ侵略や第二次世界大戦の戦火を免れてきた宮殿は、長くヴェイラ王国の、そして国王一族のシンボルとして存在していた。ここで最高評議会を開けるのは、この国で国王ただひとりだ。

「神と王家と国民の名において――」

少年が声を張り上げた。演説慣れしていない線の細い17歳の少年は、わずか1か月前に即位したばかりだった。山ほど肩章や星章などの飾りのついた白の礼服は、明らかにサイズが合っていない。右腕を天に向かって伸ばそうとすると、袖の重さに一瞬よろけた。それでも必死に前を向いたまま、震える喉から慇懃に言葉を絞り出した。

「私、レックス2世は王位を辞し、王家の持つすべての権利を廃し、国民の皆さんに譲り渡すことを宣誓します」

怒号のような歓声が響き渡った。大議場の中だけでなく、宮殿の外に集まった大勢の国民たちが喜びの声を上げている。さらには、祝砲が鳴り響く音が、雲ひとつない青空に弾けていく。数秒前まで国王の臣下だった者たちが、立ち上がり、抱き合って歓喜している。その渦の中で、少年はひとりで立っていた。

ここで、ナレーションが覆いかぶさる。「以上、15年前の民主

化決定の最高評議会の映像でした。こうして我が国は王制という古い慣習を捨て去り、新たな民主化時代へと――」

ジェイルはテレビのスイッチを切った。プチっと音を立てて画面が黒くなる。

シャワーを浴びる前にテレビをつけっぱなしにしていたせいで、見たくないものを見てしまった。濡れた髪の手先から、ぽたぽたと水滴がこぼれ落ちる。ジェイルは首にかけていた白いタオルを手にとると、丁寧に頭を拭いた。

毎年、この時期は建国祭イベントが行われるのだ。ヴェイラが民主主義共和国として生まれ変わった8月末の建国記念日まで、国全体が祝祭ムードに包まれるのと同時に、王制時代のアーカイブが引っ張り出される。それらは、「民を長年圧迫した王政」「富と権力を欲しいままにした国王一族」などといった言葉と一緒に報じられる。夏の風物詩、一大イベントと言ってもいい。

うつかりしていた。5年前にイギリスの大学院を卒業し、ヴェイラの首都に移り住んでから、なるべく王制時代のものは目に入れないようにしていたのに。特に、レックス2世の映像は。

テレビは消したはずなのに、残像が目の前で息をしているようだった。たった1か月しか在位しなかった、17歳の少年王。気張って演説に臨んだつもりでも、緊張で声が裏返りかけていた。君主だというのに、雛鳥のように怯えているのが画面越しでもわかる。礼服を着ただけの子ども。なんて哀れで、なんてブザマな王様。

今日は朝からツイていない。ジェイルは薄い唇を結んだ不機嫌な顔で、テーブルの上の食パンの袋に手を伸ばした。トースターにセツトし、その間に湯を沸かして紅茶を淹れる。鍋の中ではゆで卵ができあがっている。沸騰してからきっかり10分、シャワーから出ると同時に火を消せば、好みの固ゆでになる。

Tシャツの上に麻のシャツを羽織ってテーブルに着いた。男の独り暮らしだから、家にいるときは、極端に言えばボクサーパンツ1枚でもゆるされる。が、ジェイルがそれを是としないのは、起きて

すぐのジョギングと夜の夕食以外、ほとんど家から出ない暮らしを送っているからこそだ。生活の境目を曖昧にしていまいたくない。

軽く焦げ目のついたトーストが、いい匂いを漂わせている。紅茶からは湯気が立っている。殻を剥いたゆで卵の真ん中に、銀のナイフを差し込んだ。そのまますつと横に引くと、白と黄色の綺麗な断面図が現れた。いい感じだ。

右手に握られたナイフに、一瞬ジェイルの顔が映る。黒く艶のある髪は、ゆるやかに波打って、首の半分ほどまで伸びている。前髪も伸びきっていて、ほとんど後ろの髪と同化していた。口の周りには、やはりだらしなく伸びた不精髭。男は短髪が基本の熱帯気候のヴェイラでそんな風貌をしているのは、浮浪者か、ロックスター志望の若者か、もしくはチンピラくらいだ。

ジェイルはナイフを置いた手をトーストに伸ばした。新聞をめくりながら、無言で咀嚼していく。ナイフが陽の光を反射した。南東の空に昇った太陽は、強い日差しを降り注いでいる。アパートの外の表通りでは、通勤、通学の自転車や、朝市の商人たちの活気ある音が響いている。ヴェイラの夏の朝だった。

食器類を片付け、テーブルから朝食の痕跡がなくなると、仕事の時間が始まる。外国企業や海外のメディアを相手に、ヴェイラ語の書類やニュースを外国語に翻訳すること。もしくは、その逆。それが、ジェイルの唯一の仕事だった。といっても英語だけでなく、簡単なものであれば中国語、スペイン語、日本語でも請け負うので、全体的に言えば、それなりに仕事はあった。二間しかないアパートとはいえ、首都の中心部に家を借りていられるのはこのおかげだ。辞書をテーブルの左上に広げ、細かくチェックしながら、言葉を置き換えていく。奮発して購入したソニーのノートパソコンのキーボードが、軽快な音を立てる。集中すると時間はあっという間に経つ。集中力を切らしたくないので、昼食は摂らないことが多い。もしくは、冷蔵庫の果物やヨーグルトで済ませてしまう。

気づくと、すでに太陽は西の空まで移動している。17時を目途に仕事を切り上げると自由時間だ。立ち上がって軽くストレッチをし、部屋で一番いい場所に置いてあるリクライニングチェアへ移動する。シックな焦げ茶の革貼りが自慢の一品だ。背もたれの角度を調節でき、平らにすれば簡易ベッドにもなる。中古家具屋の店頭で偶然みかけたものだが、美品だったうえにジェイルの体格にぴったりとフィットしていて、かなり気に入っていた。

映画のDVDをレンタルしている日は、このチェアに座って映画鑑賞。そうでなければ、翻訳仕事とは関係ない海外文学を読む。ジェイルにとって、1日のうちでもっとも至福のときだ。彼はゆっくりと、チェアに身を沈めた。

第2話：最後の国王（2）

19時半になると、夕食のために部屋を出る。屋台ではなく、小さくても店として構えている食堂を選ぶ。また、あえて近所の店ではなく、少し離れた場所の店へ行くのがジェイルのルールだった。歩きながら、夜の街の空気を吸いたいという理由がひとつ。もうひとつは、自分が、特定の店の常連客になるのを避けるためだ。

今夜は川沿いにある、赤い看板の食堂に行こうと決めた。美味しい海鮮ビーフンを出してくれる店だ。入り組んだ路地を歩き始める。

ヴェイラの首都の中央には、大きな川が流れている。別名・「聖女の恵み」。大昔、このあたりは干ばつがひどい土地だったが、ある日天から聖女が現れ、この地に川を通したという。もちろん科学的には眉唾物の話だが、そんな伝説も相まって、街は川を中心に栄えている。川の東岸は新市街として、近代化が著しい。一方、川の西岸は、旧市街として昔ながらの街並みが広がる。ジェイルが住んでいるのも西岸だ。

このあたりは、かつての城下町でもある。川の上流は土地が少し高くなっていて、街を見下ろす形で、宮殿が座していた。今は行政府が設置されているだけでなく、一部が観光名所として一般公開されている。毎日、バスが広い庭園に横付けされ、旗を持ったガイドのあとを、観光客がぞろぞろとついていくのだ。

くだらない、とジェイルは思った。ロープで区切られた通路を流れ作業のように歩かせて、外国人観光客をわかったような気にさせることに、大した意味があるとは思えなかった。国や宮殿の歴史を説明したところで、帰国すれば彼らはすぐ忘れてしまう。

だが貴重な外貨獲得のためには仕方がないのだろう。エネルギー採掘や外国企業の工場誘致も進んでいるとはいえ、タイやベトナムといった近隣の国々には到底及ばない。観光業はヴェイラの重要な収入源だ。

路地を抜けると、露店が並ぶメインストリートに出る。この時間は特に、地元の人間や観光客でごった返している。東南アジアはどこも、夜になってからのほうが、人間が元気になるのだ。イギリスにもパブやクラブといった夜の盛り場はあるが、発せられるエネルギーの量が違う。子どもも老人も男も女も、我が物顔で夜の街を闊歩し、売ったり、買ったり、食べたり、喋ったりしている。

生ジューズの屋台の前にいた客引きの少年と目があつた。シャツの袖を引っ張られるのを察知して、思わずジェイルは身体をねじる。指先につかまることなく、少年の横を大股で通り過ぎた。一瞬、少年の顔に不服そうな表情が浮かんた。今は、失礼な態度だったかもしれない――。後悔がジェイルの心をよぎって、数歩行つたところでチラリと振り返る。だが、少年はもうジェイルのことなど気にしておらず、笑顔に戻って呼び込みを再開していた。

5年暮らしても、なかなか慣れないものだ。

香辛料の匂いや呼び込みの声をかわしながら、ストリートを抜けた。お目当ての店まではあと5分ほどだ。

ふと、地図を持ってあたりを見回している少女が目に入った。シヨートボブで、小さな身体に不似合いな大きなリュックを背負っている。肌の色や身なりからすると、日本人観光客のようだ。

背が低く、幼い雰囲気少女だった。髪は明るい茶色に染めているようだから、まさか小学生ではないだろうが、日本ではローティーンのうちから髪を染めたりピアスを開けたりすると聞く。ツアーからはぐれた中学生だろうか。地図と風景を比較して、きよるきよると目を動かす様子は小動物に似ていた。親と合流できなくて困っているのかもしれない。

話しかけるべきか、わずかのあいだジェイルは逡巡した。だが自分には関係ないと思いなおし、足早に過ぎ去る。不特定多数に注目されるようなことを、慎重に避けて暮らしているのだ。繁華街のど真ん中で日本語で人助けするなど、自殺行為に等しい。

海鮮ビーフンと生春巻き、氷入りのビールで夕食を済ませて、元来た道に戻る。先ほどの日本人の少女はすでにいなかった。ジェイルは内心ホッとする。やはり無闇に声をかけたりしなくてよかった。騒がしいストリートを離れ、アパートのある路地に入る。ツイてない日だと思っただが、つつがなく過ごすことができた。家に帰ってコーヒーでも淹れ、読書の続きをしよう。日付が変わる頃ベッドに入り、眠りに就く。いつも通りの1日だ。小さな達成感が、ジェイルの胸に広がる。

だが、最後の最後でそれはやってきた。

アパートの入口に人影をみつけて、ジェイルは足を止めた。蛍光灯に照らされた人物を見て、驚いた——玄関の段になっている部分にぺたんと腰かけているのは、さっき見かけた、日本人の少女ではないか。

少女がジェイルに気づく。ジェイルが何か言うより先に、少女が素早く立ち上がり、叫んだ。

「やーっと、みつけたー!!」

大きな瞳を輝かせて、嬉しそうにジェイルを指差す。人違いをしているのだろうか。思わずジェイルが身構えると、少女は我に返ったように、「あっ! ……ヤンナー!」と挨拶した。「ヤンナー」はヴェイラ語で「こんにちは」の意味だ。

「日本の方ですか?」

ジェイルはようやく口を開いた。

彼の口から出てきたのが流暢な日本語であつたことに、少女がビツクリした顔をする。

「すごい。日本語うまいですね」

「旅行者ですか? ツアーからはぐれましたか?」

「そういえば、ウィキペディアに数ヶ国語喋れるって書いてあつた!」

ジェイルの質問に答えていないどころか、何を言っているのかわからない。このガキはいったい何なんだ。

怪訝な顔をするジェイルの警戒を解くように、少女は笑いかけた。
「私、オビサワ・チセといいます。あなたを探して日本から来ました。取材させてほしくて」

取材、という言葉にジェイルは身を固くした。嫌な予感がする。
「人違いでしょう。さようなら」

無理やり会話を断ち切って、アパートの外階段を上がろうとする。
しかし、少女の能天気な声が後ろから追いかけてくる。

「人違いじゃないですよー。確かに15年前の写真からだいぶ雰囲気変わってるけど、ヒゲがなかったらこの顔だもん」

思わずジェイルは振り返った。少女はいつの間にかiPhoneを取り出して、画面の写真とジェイルを見比べていた。映っているのは、今朝テレビで目にしたばかりの――。

ジェイルの瞳が見開かれる。少女はにっこりと笑った。

「あなたがレックス2世ね？ ジェイル・レックス・ハツサ・チュンクリット。最後の国王で、15年前に民主化を断行した張本人。私、あなたに会いに来たの」

第3話：ヒゲと少女

面倒なことになった――。

ジェイルの脳内で警鐘が鳴り響く。だが、動揺を悟られてはならない。

「人違いです」

あくまで無表情を装い、きっぱりと答える。同じようなことは、これまで何度かあった。とにかく否定し続けて、相手に有無を言わさないのが肝要だ。しつこいようなら、多少威圧的になっても仕方ない。ヒゲ面の男が凄めば、さすがに相手も……。

「って、写真を撮るな!」

叫んだときには、既にiPhoneのフラッシュが焚かれたあとだった。チセが画面を覗き込んでしゃぐ。

「結構よく撮れてる」

「やめろ! 何するんだ!」

「あ、でも髪の毛もうちょっと流したほうがいいかも?」

「おい……」

先ほどからまったく話の通じない相手に、ジェイルは疲労感すら覚え始めていた。

チセがふとiPhoneから顔をあげ、小首をかしげて笑った。

「丁寧語だけじゃなくて、話し言葉も上手ですねえ。その口調、平間准教授そっくり」

「ヒラマ……?」

ジェイルの顔色が変わる。背の低いチセに合わせ、ぐいっと腰をかがめて顔を近づけた。

「タカシ・ヒラマのことか? トーキョー・ユニバシティの?」

ヒゲ面が急接近したことに頓着する様子もなく、チセは頷いた。

「そうです。私、平間ゼミの学生なんです。レックス2世さんのことも、准教授から聞いて」

思わずジェイルはチセの口を手でふさぐ。隙間からぐふつと空気の音が漏れた。

「その名前を言うな！」

そのときアパートの前の路地を、訝しげな目でジェイルとチセを見ながら親子が通り過ぎていった。ジェイルはハツとする。路地とはいえ、人通りはそれなりにある。ヒゲの男が少女の口をふさいでいる姿は、否応なしに目立つだろう。犯罪場面と勘違いされてもおかしくない。

「クソッ」

天を仰ぎ、英語で罵り言葉を吐いた。チセの口から手を離し、代わりに腕を掴んで引つ張るように外階段を上り始める。チセは怯えるどころか、大きな瞳をきよるきよるさせながら付いてきた。だから、このガキは一体なんなんだ。

「そこにいろ」

チセを部屋に引つ張り込むと、テーブルの椅子を指差す。返事も確認しないまま、ジェイルは扉で仕切られた奥のベッドルームへと駆け込んだ。食事や仕事に使っているのはメインルームで、こちらはほぼ本棚と寝具だけの部屋だ。

棚から手帳を取り出して、大急ぎでめくる。TAKASHI HIRAMAの文字をみつけ、ベッドサイドに置いてある電話の受話器を掴み取った。81という日本の国番号に続けて、携帯電話の番号を入力する。

国際電話特有の発信音に飽きかけた頃、相手が出た。

「もしもし」

「Hello、タカシか？」

英語で切りだすと、ハツとした気配がした。

「ジェイ？ 久しぶりだな！ どうした？」

イギリスの大学院に通っていた時代、ルームメイトだったのが日本から来た平間高志だった。年齢はジェイルより8つ上だが、ざっ

くばらんとした性格と、アジア人同士という親近感もあつて、気の置けない付き合いをしていた数少ない友人のひとりだった。

だからジェイルにしては珍しく、感情を露わにすることができるとどうしたもこうしたもねーよ。お前、ふざけんなよ。何なんだよあいつは！」

「へ？ なんのことだよ？」

タカシが間の抜けた声を出すので、ジェイルはさらに早口でまくしたてた。

「チセ・オビサワとかいう日本人の女のことだよ。いきなり俺の家に来て、『取材させてくれ』だよ。お前のゼミの学生とか言ってたぞ。俺の素性を教えたのか？」

「おま、早口でわかんねえよ……。え？ おひさわ ちせ 帯沢千星が、そっちにいるのか？」

4年間イギリスにいたにも関わらず、タカシは英語が下手だった。国際政治学の准教授ともあるうものがそれでもいいのかと思うが、日本で若手の研究者として頭角を現していることは、ジェイルも伝える聞いていた。

ジェイルは日本語に切り替える。少なくとも、タカシの英語よりジェイルの日本語のほうが数段、うまい。

「隣の部屋にいるよ。すげえ変なガキ。大体あの子、いくつだよ？ 10代だろう？ 日本の大学も飛び級制度を導入したのか？」

数秒の沈黙のあと、タカシは突然噴き出すと、いきなり爆笑した。「だははは！ あの子、ちっちゃえもんなあ。でも3年生だから今年で21歳だよ。リーガルな年齢。そうかあ、変わってる子だと思つてたけど、マジでヴェイラまで押し掛けたかあ」

ジェイルの苛々に構うことなく、タカシはゲラゲラと笑い続けた。「笑いごとじゃねえよ。説明しろ」

「すまんすまん。確かにウチのゼミの学生だな。将来ジャーナリストになりたいとか言つてて、俺がお前とルームメイトだったって話をぼろつとしたら、すげえ食いついてきたんだよ。もともと比較政

治論とか体制移行に興味あったみたいでさ」

「だからって、お前は俺の住所まで教えるのか？」

思わず、非難めいた口調で詰め寄る。

「いや、さすがに教えねーよ。……教えてないが、心当たりはある」

おそらく、と前置きして続けた。

「どうしてもって言うんで、お前から来たクリスマスカードを見せたことはあった。その最中に電話がかかってきて数分席を外したから、写メでも撮られたかもしれん」

「泥棒じゃねえか」

オーマイゴツシユ、とため息が漏れる。

「なあタカシ、日本の学生は、頭は良くても道德ってものを知らないのか？」

「少なくとも、大学に道德を教える義務はねえよ。ゆとり世代は俺たちにも手に負えん」

「ユトリ……？」

聞き慣れない言葉をジェイルが聞き返すと、タカシがまたゲラゲラと笑った。

「そういう教育制度があつてな。まあそんなわけなんで、夏休みを利用してお前に会いに行つたんだろ。しかし最近は、女の子のほうが行動力あるなあ」

「感心してる場合か。言つとくけど、俺は取材なんて一切答えるつもりないからな。昔のことはもう関係ないんだ。そのために俺は……」

……

ジェイルの言葉を紡ぐように、タカシが続けた。

「できるだけ一般人らしく生きてる、んだろ」

ジェイルは押し黙った。大学院時代、はじめてタカシに過去を知られたときも、自分は同じことを言った。

王制が崩れてすぐイギリスに渡り、ありふれたアジア系の学生として過ごしながらも、素性がばれることを常に警戒していた。当初はカメラのシャッター音や、東南アジア出身の人間とすれ違うこと

にすら、いちいち反応していた。

自意識過剰だという自覚はある。だが、おかげでなんとか15年間、平穏を保ってこれたのだ。

「わかってるよ。帯沢さんのことは俺に気を遣う必要はない。お前の好きにすればいいさ」

タカシが笑いながら言った。自称「小岩出身のヤンキー」らしい彼は、実際高校を卒業しておらず、大検を取って大学に入ったらしい変わり種だ。そのせいか、研究者とは思えないくらい口が悪い。寮生活を数年間とにした結果、ジェイルの日本語は、影響されてかなり砕けたものになってしまった。

「ところでジェイ、今も翻訳で生活してるのか？ 論文を書くつもりはないのか？」

タカシの声さがりげなく一段低くなったのを感じて、ジェイルは自嘲めいた笑い声を洩らす。

「大丈夫、間に合ってるよ。それよりお前が先月『フォーリン・アフェアーズ』に載せた論文読んだぜ。相変わらず英語は下手くそだが、考察はなかなかよかった」

うつせえよ、というあけすけな反応を聞いて、ジェイルは我知らず肩の力を抜いた。親友と呼んでいい関係のタカシにすら、突かれたくないこともある。きっとタカシは、わかっていてすぐ引いたに違いないのだが。

また連絡するよと言って、ふたりは国際電話を終えた。

第4話：フォークダンス

電話を終えて一拍置いてから、ジェイルはわざと乱暴にドアを開けた。

iPhoneを操作していたチセが顔をあげる。言われたとおり、素直に座っていたらしい。ジェイルを見上げて、チセは無邪気に笑った。やはり、21歳には見えない。椅子の上でちょこんと体操座りし、両手でiPhoneを持っている姿は、アライグマを彷彿とさせた。

「タカシと話をついた。帰ってくれ」

ぶつきらばうに腕を組み、チセを見下ろす。全身で拒否の意思を表しているつもりだった。

チセはきょとんと小首をかしげた。

「私は私の意志でここに来ているので、平間准教授は関係ないです」
わからないガキだ。ジェイルは顔をしかめて腕を組み直す。

「じゃあ言い換えようか。タカシの教え子だろうとなかろうと、俺は、君とこれ以上話すつもりはない。取材を受けるつもりはない。以上だ」

強い口調で言い放った。だが、チセは表情を変えることなく、大きな瞳でじつとジェイルを見つめ返してきた。動物のような不思議な目だと、ジェイルは思った。考えていることが読めない。

「なんで？」

「え？」

思わず聞き返した。

「なんで取材したくないんですか？」

ふざけているのかと思っただが、チセは本気で訊いているらしかった。疑問を口にすれば、親がなんでも教えてくれると思っている子どものように。その無邪気さに、ジェイルは妙に腹が立った。

「プライバシーって知ってるか？俺は、プライベートなことを親

しくない人間に話すつもりはない。特に過去のことは」

拳を握りしめる。語気が荒くなる。

「俺はもう引退した身だ。一般人だ。喋る義務も責任もない。普通の人生を送るために努力してるんだよ。取材なんてもってのほかだ」カメラに追い回され、新聞に書きたてられた日々を、ジェイルは忘れない。

メディアは大義名分をかざして、人の生活に入り込んでくる。父の訃報を受けて、当時の留学先であるスイスから戻ってきた17歳のジェイルを待ちかまえていたのは、無数のフラッシュだった。

“国難の時期に、のうのと外国へ留学していた王子が、今更帰って来た”

すでに国政は内紛続きで、王室の人気は急落し、民主化運動は止められないうねりとなっていた。王室はメディアをコントロールする力すら失いつつあった。彼らにとって、ジェイルは恰好のネタだった。

「だいたい、今更何が知りたいんだよ。もう全部終わったことだ。カネをもらって昔のことをべらべら喋るヤツらもいるが、俺は違う。昔の身分にすぎりついているような、薄っぺらいセレブリティ気取りたちとはな。俺は、社交も慈善事業も大っ嫌いなんだよ！」

あの頃、フォークダンスの真ん中に突然放り込まれたようだった。大勢がジェイルのまわりを輪になって取り囲み、一方的にすり寄ったり、写真を撮ったり、罵声を浴びせたりしながら、ぐるぐると回り続ける。ジェイルが円から出ることはできない。

民主化は自分ひとりで決めた、国王として最初で最後の仕事だった。王党派や軍部は撤回を求めて怒り狂ったが、もはや知ったことではなかった。どちらにしろ民主化は時間の問題だった。ならば、さっさと見切りをつけるべきだ。

権力がなくなれば、ただの人だと世間は言う。実際、王位を返上して民主政権が誕生してしまえば、フォークダンスに興じた人々は散り散りに去って行った。忘れられることに、むしろジェイルは安

堵した。だが、今でも拭えない疑問が、どこかにこびりついている。

——でも、俺だけが、そんなに悪かったのか？

「ジャーナリスト志望だかなんだか知らないが、私生活に土足で入り込んでくるな。スクープを取れば満足か？ そっちは良くて、こっちはたまったもんじゃない。お前たちは表面だけすくいとって、わかったような気になりたいだけだよ。恵まれた日本の大学生のお遊びに、付き合っているヒマはない」

言い切って、ようやくジェイルは我に返った。

興奮のあまり、肩で息をしていた。言葉の熱気がこもる部屋に、南国の夜風がふわりと流れていく。

さすがに最後の部分は言いすぎたかもしれない、と気づく。だが、ここまで言わせたのはあいつだ。バツの悪さと開き直りが同居した思いで、ジェイルはチセの表情を窺った。

チセはほとんど体勢を変えないまま、ジェイルを見ていた。

怯えて動けないのか、と思ったその矢先。チセは満足気に口角をあげて——笑った。

「今日はこれが聞けただけで、じゅうぶん」

チセはぴょんと、身軽そうに立ち上がった。山登りにでも行くような大きなリュックを平気で背負うと、啞然としているジェイルをよそに、すたすたと歩き始める。

「どうも、お邪魔しました」

あれだけ出ていってほしいと思っていたのに、なぜかジェイルは慌てた。玄関に向かうチセを追いかける。

「おい……いいのか？」

我ながら、おかしいことを言っているとジェイルは思う。

「ジャーナリストは根性がないと務まらないですから。1回で話聞けるなんて最初から思っていないですよ。取材相手に信用してもらったところからはじめないかね」

チセが敬礼のポーズをした。小ぶりの口が卵型に開く。

「現場100回精神！」

「ゲンバヒヤツカ……って、また来るつもりか!？」

ジェイルの声が裏返った。

「あ、そうだ。このへんで、安いホテル知ってますか？」

「ホテル、予約していないのか!？」

「あなたのこと探してたら、ホテルまで取るヒマなかったんだもん」
しれっと答えるチセに、ジェイルは目眩を覚えた。

タカシと電話したり、チセと押し問答しているあいだに、時刻は23時を過ぎていた。ヴェイラはそう治安が悪い国ではないが、ここ数年は失業率の上昇で、犯罪が増加している地区もある。こんな時間に、年頃の日本人の少女が暗い路地を歩くのは……。

一応タカシの教え子でもあるのだ。取材の話は置いておくとして、犯罪に巻き込まれでもしたら、合わせる顔がない。

「カラオケとかネットカフェでもいいんだけど——」

ある訳ねえだろ、と突っ込みたいのを必死にこらえて、ジェイルは壁に手をつき、ガクリとうなだれた。部屋を指差して、目も合わせずに呟く。

「今夜だけだ。絶対に今夜だけ。朝になったらすぐ出る」

俺は何をやっているのだろう。ジェイルは天を恨んだ。チセに会ってから、調子を狂わされっぱなしだ。だから、ガキは苦手だ。

「わあい。じゃあ、お言葉に甘えさせてもらいまーす」

チセがジェイルの脇を、軽やかな足取りで通り過ぎていく。初対面の外国人の男の家に泊まることに、もう少し遠慮や抵抗があってもいいのではないだろうか。これが“ユトリ世代”というやつなのだろうか？

チセの明るい声が響く。

「あ、充電したいんで、コンセント借りてもいいですかあ？」

第5話：走る男

「眠れねえ……」

明るくなつた空を眺めながら、ジェイルは今日だけで数十回は言つたであろうセリフを、また呟いた。

ごろりと身体の向きを変えると、寝台が軋んだ。リクライニングチェアの背もたれを倒して、ベッドとして使っている。昼寝にはちよつどいいが、一晩眠るとなると少し固い。枕の位置を数センチずらしてみても、しっくりこない。

隣の部屋の使い慣れたセミダブルベッドは、別の人間に占領されている。帯沢千星という名の、とびきり変な日本人に。いや、チセは床で寝ると言い張つたが、それはジェイルが納得しなかった。

あくまで親切心からではないと、再び寝返りを打ちながら、ジェイルは自分に言い聞かせる。彼女の言動を思えば、確かに床に転がしたって構わないと思う。あえてベッドを譲つたのは、パソコンや貴重品のあるメインルームを使わせなくなつたというのもあるが、親しくない客人ほど丁寧に扱うほうがラクだからだ。そのほうが後腐れがないし、貸しを作つておいたほうが後々の交渉で有利になる。どうせ一晩だけの我慢だ。

「ヴェイラは小国がゆえ、力技ではない外交が求められるのです」
そう言つたのは、王室付きの家庭教師だつたらうか。

ぼんやりと思ひだしかけて、やめた。昨日から過去のことばかり考えすぎている。

顔に腕を乗せて、朝の光をシャットアウトした。そのまま30分ほどまどろんだところで、音を最小に設定しておいた目覚まし時計が鳴る。7時半。まだ寝ていたいところだが、ジェイルは身体を起こした。こんなときこそ、いつも通りのサイクルで活動すべきだ。

隣の部屋の物音に耳を澄ます。チセはまだ起きていないようだった。家の主人は寝られなかったというのに、なんと図太いガキだろ

う。呆れていいのか感心していいのかわからないまま、ジェイルはそっと家を出た。

アディダスのスニーカーが小石を蹴る。息を吸って走り出した。太腿の筋肉が引き締まるのを感じる。ゆるやかに速度を上げて、ペースを掴んでいく。通り過ぎる人や車の輪郭がぼやけ、そのうち、街のざわめきがふっと遠くなる。自分の吐く息の音だけが生々しくなる。そうなればもう、意識しなくても、手足は勝手に動き続けている。

朝のジョギングは5年間、ほぼ欠かしたことがない。ペースを保って走っているときの、世界から切り離されるような、この感覚が好きだからだと思う。目覚め始めた街をすり抜けるように、ジェイルは走って行く。

眩しい光が、右斜め前から差ししてくる。朝は神聖だ。イギリスからヴェイラに戻って以来、そう思うようになった。ヴェイラとイギリスは似ていない国だが、特に空はまったく違った。10年ぶりに帰国したとき、曇り空が普通のイギリスに比べて、ヴェイラの抜けるような青い空に目がくらんだものだ。最初は慣れなかったが、今はこの眩しさがいいと思う。あれこれ考える余地を奪い、走ることに専念することができる。

ルートは特に決めていない。蹴り出したときの感覚で、気が向くままに走る。川を渡って新市街まで足を伸ばすこともあるし、旧市街の迷路のような町並みをぐるぐる回ることもある。首都といってもそう大きな街ではないから、1時間あれば、たいいていのエリアには足を伸ばすことができる。今日は、寺院や墓地が並ぶ静かな道を選んだ。道の脇にプルメリアの木々が高く生い茂っている。くつきりした緑色の葉のなかに、無数の可憐な白い花びら。花びらの中央は、黄色い絵の具をスポイトで垂らしたように色づいている。

行商の老婆と行き違った。ヒゲの男が軽快に走る様子を、彼女は物珍しそうに見た。祖母と同じほどの年齢だろうか。間違っても、ジ

エイルの正体には気づかないだろう。そう考えて、口の端があがった。ジョギングが好きなもう一つの理由。街中でも顔を隠す必要がない。走っているとき、俺は自由だ。

アパートの前まで戻り、息を整える。昨晚チセのせいで見そびれていた郵便受けを確認すると、イギリスから転送された手紙が一通届いていた。

タカシなどのごく親しい者を除いて、ジェイルは今住んでいる住所を教えていない。実の母と姉妹にさえも。対外的にはまだイギリスにしていることにしている。大学院で研究を続ける友人に頼んで、手紙の類は転送してもらっていた。

差出人と内容はわかっていて。この数か月で3通目だ。手で破って中身を確認すると、やはり思ったとおりだった。一瞥しただけで封筒に戻すと、掌のなかで丸めた。

帰ってきて、まだ家は静かだった。届いたばかりの手紙をゴミ箱に捨てる。

今のうちにシャワーを浴びることにする。その前にキッチンに立ち、鍋に水を張った。無意識のうちに冷蔵庫から卵を2個取り出して、鍋に移そうとしたところで、ふと立ち止まる。

「……」

左手の卵を額に当てて、数秒停止した。

「招かれざる客、だろう」

片方の卵をケースに戻した。そこまでもてなしてやる必要はない。チセが起きたらすぐに叩き出さなければ。

シャワーを浴び終わってまずするのは、ガスの火を止めること。10分以上茹でると、卵が固くなりすぎる。濡れた身体をざっと拭き、とりあえずスポンだけ履いて、部屋を大股で横切った。ジェイルがガスの栓を回したのと、玄関のドアが開いて、チセが現れたのは同時だった。

「ただいま」。あ、もうお風呂出ちゃってる」

奥のベッドルームにいとばかり思っていたチセが真反対の方向から現れたことに、ジェイルは取り乱した。

「部屋にいたんじゃないかったのか」

寝癖なのか、チセは前髪が少しハネていたが、すでに普段着に着替えていた。両手にビニール袋を持っている。

「シャワー浴びてる隙に、ちよつとそこまで」

普段なら自分を見上げるチセの視線が、なぜか胸のあたりにある。そこでやっと、上半身裸だったことにハッと気づいた。

「あ、あっち向いてる！」

チセに背を向けてしゃがみこみ、慌てて手にしていたＴシャツをかぶる。髪がまだ濡れているので気持ち悪いが、それどころではない。

「別に気にしないのに」

呑気な声が上がってきた。お前じゃない、俺が気にするんだよ！と心の中で叫ぶ。日本の道德観念は大丈夫なのだろうか？ 少なくともヴェイラの未婚の女は、成人男性の裸をまじまじとみづめることなどしない。

「露出してない部分、思ったより肌が白いですねえ。日本人みたい」

トボけたふりして、細かいところをよく見ている奴だ。そんなチセの指摘を無視して、後ろ髪の水滴を振り払い、何事もなかったかのように立ち上がった。

「どこに行ってた」

チセがビニール袋をあげてみせる。ナンプラーの香りが漂った。

「泊めてもらったお礼に、朝ごはんをと思って。表の屋台で麺買ってきました。さっぱり系と辛い系両方あるので、好きなほう選んで

……」

「いらない」

ジェイルは低い声で遮った。チセがきよんとする。

「麺じゃなくて、揚げパンのほうがいいですか？」

チセのほうを見ずに、ヤカンを火にかけた。食パンをトースターに入れ、食器棚から皿を取り出す。

「朝食は決まっている。それは自分で食べ」

チセがテーブルに荷物を置いた。ジェイルの表情を覗き込んでいる気配がする。

「それって、ポリシー的なものですか？」

タオルで髪を拭きながら、聞こえないふりをした。ヤカンがうるさく鳴って、沸騰を知らせる。紅茶のポットに湯を注ぎながら、誰に聞かせるでもなく、ぼつりと自国語でつぶやいた。

「……屋台のものは食べない」

屋台のものは食べない。

トーストが、チン！と間抜けな音を立てて飛びだした。

第6話：スコールの後で

ずるずるずる、と麺をすすする音が部屋に響く。ジェイルは翻訳を打ちこむ手を止め、うんざりした表情でパソコンの向こう側の少女を見た。

「……気が散る」

唇と麺を垂直に交差させた状態で、チセが目だけを動かした。

「ふあつて、めんふあゝ」

「飲みこんでから言え」

つややかな米麺が、つるるっ！と威勢よく飲みこまれた。

「だって、麺を食べてて音が出るのはしょうがないじゃないですかあ。そもそも、自分で食べるって言ったのそっちだし」

悪びれないチセの目線を払うように、ジェイルは手元のペットボトルに口をつけた。

確かに、2人前の屋台麺を自分で食べると言ったのはジェイルだ。だがトツピングを大量に追加した大盛りを買ってきたとは聞いていない。

「一気に食べられないから、片方は朝ごはんにして、もう片方は昼ごはんにします！」

勝手にチセに宣言され、嫌がると「食べ物を粗末にしているんですか？」と詰められた。反論できずに放っておいたら、向き合ってトーストと汁麺の朝食を取るという奇妙な状況になった。その後、仕事を始めたジェイルをほったらかして、散歩に出たり部屋の文献を読んだり、チセに好き勝手されているうちに、すでに時刻は昼である。

「お腹空かないんですか？ 半分こしますか？」

「断わる」

「美味しいのにー。米の麺って、冷めても美味しいですねえ。ライムの味が効いたそうめんって感じ。刻みネギ乗つけてもいいかも」

つつけんどんに扱っているのに、チセはまったく気にする様子がない。いつ取材の話を持ち出してくるのかと思っていたが、その気配もない。

いちいち反応する自分がバカらしくなって、ジェイルはパソコンの画面に視線を戻す。今日手掛けている翻訳は、アメリカの企業に送る、ヴェイラの政治経済情勢に関するレポートだった。

“ヴェイラ国民党のドルーダ首相が、政権運営の危機に瀕している”
淡々とキーを打つ。

“昨年、経済政策の失敗の責任を追及されて退陣した前首相に代わって、新たに首相となったばかりだが、増税案を打ち出したことに野党が反発している。首相の親戚が汚職に関与していたという疑いが報じられたこともあり、野党は追及していく見込み。国民党側は徹底抗戦の構えだが、支持率が低下を続ければ、議会の解散もあり得る。そうなればこの5年間で4回目の解散となり、政治的混乱は避けられない。”

格差の拡大や債務問題など、問題は山積みだというのに、政治家たちは政局に終始している。ヴェイラはASEANの次期議長国になることが決まっている。民主化してから一番の国際的大役になるだけに、どの政党も自分たちの手柄にしたがっているのだ。

憂慮すべき事態だと思う。だが怒りを感じるよりも、どこか他人事のように感じてしまっていた。

“これを受け、陸軍のロチャ元将軍がヴェイラ国民党を訪問。遺憾の意を表明した。”

ロチャ元将軍が、まだしゃしゃり出てくるのか。ジェイルは心の中で舌打ちする。彼は軍部の大物で、民主化に最後まで反対したひとりだ。民主化後も、軍部・右派を中心に一定の影響力を持ち続けている。もう80歳を過ぎているだろうに、元気なジジイだ。

「なーんか、ASEAN利権に目がくらんでるって感じですねえ」
いつの間にかチセが後ろに立って、画面を覗き込んでいた。ジェイルは思わず振り返る。

「国内の問題から目をそらすために、外交に力を入れるってのは、政治の常套手段ではありませんけど」

ジェイルの肩越しに画面を見ながら、チセが腕組みをする。

「……ヴェイラにとって、次のASEANはどのような意義を持つと思う？」

「2013年に中国の国家主席が交代になりますよね。その重要なタイミングに、議長国として対中国の姿勢を打ち出すことができれば、2015年のASEAN共同体発足に際して大きな発言力を得ることができるのかなあ、と」

さらりと答えたチセに、ジェイルは内心驚いていた。ヴェイラを取り巻く国際情勢をよく理解している。しかも、ビジネス用の英訳を正確に読んでいる。一応、タカシのゼミで学んでいるだけのことはあるらしい。

「あ、ここ、スペル間違ってます。aじゃなくてeですよ」

ジェイルの胸の内を知らず、チセは無邪気に画面を指差した。

「……今、直そうと思ってたんだ。あっち行ってる」

「はい」

チセは素直にリクライニングチェアのほうへ歩いて行った。チセに指摘されたのが恥ずかしくて、猛スピードで誤字を直した。キリのいいところまでまとめ、上書き保存をクリックする。横目でチセの姿を探した。

チセはリクライニングチェアの端に座り、窓からの景色を眺めていた。クーラーをかけているのに、勝手に窓を少し開けている。隙間から入ってくる風を、目を細めて受けていた。カーテンがふわりと揺れた。

時が止まったように穏やかな午後だった。ジェイルの胸に、はるか昔の記憶がよみがえる。王宮にいた頃、午後の勉強が終わったあとにテラスのある部屋でおやつを食べるのが日課だった。白い前掛けをつけたメイドたちがサーブしてくれる、南国の新鮮やかなフルーツや焼き菓子に、砂糖を入れたジャスミンティー。姉と妹のおし

やべりを横で聞いているうちに、いつの間にか眠くなることがよくあった。20年以上前、10歳にも満たぬ頃の話だ。

あんな日々もあったのだ、自分にも。

窓の外で派手なクラクションが鳴り、我に返る。表の車道の音が追想を掻き消した。

「――食い終わったなら、荷物をまとめて、出る」
「ちえ」

チセはジェイルを見上げて、いたずらが見つかったような笑顔を見せた。そんな顔をされたら、子ども時代の思い出の続きにいるような気がしてしまう。

「じゃ、また来ます」

「来るな」

「また来ます」

掴みどころのない笑顔を残して、チセは去って行った。

チセが去ると、部屋は急に静まり返った。

キーを叩く音が、やけに大きく響いた。翻訳の仕事を再開するも、なぜか今ひとつ捗らない。あまり寝ていないせいだ、とジェイルは諦め、いつもよりはやく仕事じまいした。きちんとリセットして、明日から元通りの生活を送ったほうがいい。

リクライニングチェアに深く座って、窓の外を眺めた。日は少し傾き始めている。あっという間に眠気が襲ってきて、ジェイルは瞼を閉じた。

本当に、変な奴だった。

子どもみたいな外見で、何も考えていないような言動を繰り返しながら、いきなり核心を突いてくる。そのくせ、真意が掴めない。精神が内に引っ張られていくように、眠りに落ちていく。

遠く、雨が降り始める音が聞こえた。スコールだ。亜熱帯気候に属するヴェイラの雨季では、スコールは日常茶飯事である。窓を閉めなければとぼんやりした頭で思うが、身体は動かない。

雨が激しく地面を打つ音を聞きながら、ジェイルはリクライニンググチェアに沈んでいた。

夢うつつの瞼の裏に、さまざまな記憶が溢れては引いていく。幼少期のこと、少年時代のこと、イギリス留学中のこと。

——ああ、そうか。

こんなに思い出すのは、久しぶりに誰かと喋ったからだ。この5年間、生きるのに最低限の会話しかしていなかった。思い出を思い出すきっかけすらなかった。

流れていく記憶は倍速のDVDのようだったが、目まぐるしさはなく、心地よかった。懐かしい、という久方ぶりの感情を抱きながら、ジェイルは眠りに身体を委ねた。

激しく扉を叩く音で目が覚めた。

ジェイルは寝ぼけ眼で、あたりを見回す。いつの間にかスコールは止み、すっかり夕暮れになっていた。

もう一度、ドンドンドンという音が玄関から聞こえた。郵便だろうか。そういえばドアブザーの調子が悪かったから、ドアを直接叩いているのかもしれない。それにしても乱暴だなど思いながら、慌てて口の端の涎をぬぐい、立ち上がった。

ガチャリとドアを開けて、ジェイルは目を見開いた。

びしょ濡れのチセが、水を滴らせながら立っていた。

「観光中に、スコールがきて……」

白いカットソーが水気を含んで、ぴったりと肌にくっついていて。中に着た水色のタンクトップの線を浮き上がらせている。

「雨合羽を出そうと思ってリュックに気を取られてる間に、貴重品を入れてたポーチを盗まれたんです」

餅のような肌は、濡れたせいかますます白くなっている。

「その中にパスポートが入っていて。追っかけたんですけど……」

「もしかして、まだ、ホテルにチェックインしてなかったとか言わないよな？」

一縷の望みをかけて問いかけたが、悪い予感の通り、チセはくんと頷いた。

パスポートなしでは、外国人はまともなホテルに泊まることはできない。大使館に申請しようにも、今日は土曜だから、はやくても再発行の手続きは月曜になるだろう。

ジェイルは長いため息をついた。こうなるような気が、どこかでしていた。諦めろ、と神様に言われているようだ。

「まあ、とにかく入れ。風邪ひくぞ」

チセを招き入れながら、ジェイルはなぜか笑えてきていた。

第7話：ねじまき少女

「建国祭イベント中の土日は、広場に花市がずらーって並んで、すごい綺麗なんですよー」

よく晴れた土曜の午前にふさわしく、ふんふんと鼻歌をうたいながら、チセがガイドブックのページをめくっている。

「夜はランタンで街中がライトアップされるんですよ。闇の中に浮かぶランタンってめちゃくちゃロマンチック。前、『世界ふしぎ発見』で放送されてたんですよ！ほかに、伝統芸能のダンスが見られたりとか、屋台もいっぱい出るんですよ」

チセがガイドブックを、ぐいとジェイルの目の前に突き出した。

「だから行きましようよう、お祭り」

「イ・ヤ・だ」

ハエを除けるように、ジェイルは露骨に眉をひそめて手で振り払う。しかしチセは意に介さず、楽しそうにのぞきこんできた。

「せっかくヴェイラに来たんだから、行かないや損じゃないですか」

「じゃあ、ひとりで行け！」

「お祭りは大勢で行くほうが楽しいですよ。それに、土曜まで引きこもつてるとメタボになっちゃいますよー」

起きてから、ずっとこの繰り返しだ。迫るチセと、阻むジェイル。頑として首を縦に振るつもりはないが、持久戦に持ち込まれるのは避けたほうが賢明なことはわかってる。

「休みの使い方は自分で決める。祭でもどこでも勝手に行って来い」
「わっ、このアイス屋さん美味しそう。ミントマンゴー味ってどんな感じですかね？しかも割引券ついてる」

ガイドブックの写真を指差すチセに、ジェイルは言い返す気力も失う。

パスポートを盗まれたチセを、やむを得ず家にあげたのが昨日の夕方。週が明ければ大使館で再発行の手続きができる。不毛なやり取

りも、この土日だけの辛抱だと思えば……。

ピンポンパン、と間抜けな音が部屋に響いた。チセのiPhoneが振動しながら鳴っている。着信音までふざけた女だ。

「あ、もしもし？」

ジェイルがいるのも気にせず、その場でチセは喋り始めた。この隙に本を持って奥のベッドルームに閉じこもってしまおうかと思っただ、部屋にはチセの荷物があるので無駄だと思いなおし、とりあえずパソコンのキーボードを指でいじる。

「うん。うん。だからあ……それは大丈夫」

パソコンの画面を見ている、チセの電話がなんとなく気になってしまう。「ギリシャでゼネスト」というGoogleニュースを見ているジェイルの耳を、チセの声がかすめていく。相手は、どうやら男の声のようだ。彼氏か？ と想像しかけて、いやいやと心の中で首を振った。つまらないことを考えるのはよそう。

「わかった。じゃあ、ちよつと待って」

チセはそう言ったかと思うと、いきなりジェイルのほうを振り返った。

「すみません、代わってもらえますか」

「え、おい！？」

「適当に喋ってもらえれば大丈夫なので」

投げるようにiPhoneを手渡され、つい両手で受け取ってしまっ

てのひらの機械のディスプレイには、「通話中」の文字が光っている。抗議しようとチセを見ると、すでにガイドブックを持って窓際に移動していた。

仕方なくiPhoneを耳にあてると、弱弱しい男性の声が飛び込んできた。

「ハ、ハロー……？」

今どき珍しいほどのカタコトの発音だった。もう一度繰り返される。

「もしもし……ハロー？」

「日本語、喋れます」

ジェイルが口を開くと、回線の向こうで息を呑んだ音が聞こえた。「ああ、よかった。お世話になっております。あの子、いきなりいなくなっただけと思ったら、事後報告で『ヴェイラにいる』なんてメールしてきて。いつもそんなんですよ。たいがいのことでは驚かなくなりましてけど、心臓に悪くて。我が娘ながら、何を考えているのやらさっぱり」

「娘！？」

思わず聞き返した。

「失礼、申し遅れました。常沢と申します。千星の父でございます。ええと、ジェイルさん……でよろしかったでしょうか。大学の先生の研究仲間と伺っておりますが。ゼミの研修旅行で、しばらくお世話になっていると先ほど聞きました。もう本当に、何も言わずに出かけて行ったものですから。そちらでもご迷惑をかけていないといいのですが」

「いえ、まあ……」

何も言われていないのは、ジェイルも同じだ。チセのほうを見るが、こちらの会話など聞こえないように、鼻歌を歌いながらガイドブックをめくっている。嘘の口裏を合わせることもなく、平気で実の親と会話させるなんて。ゼミの研修旅行だと？ まったく、実にふざけた女だ。

「娘さんはいつも、こう、積極的な……性格で？」

嫌味っぽく聞こえないように気をつけながらも、チセへの最大限のあてつけのつもりで、ジェイルは慇懃に日本語を発音した。

「まったく、突飛な行動をする娘でして。ご迷惑をおかけしていませんか？」

人の好きそうな父親は、恐縮したように言った。

「母親がいないせいか、やんちゃに育ってしまいました」

「え？」

ジェイルは素で聞き返していた。

「父ひとり子ひとりなのに、仕事が忙しくて構ってやれなくて。ひとりでもやってしまいう子だったので、私も甘えていた部分があるんですけどね」

父親はしみじみと語るが、ジェイルはこの会話がチセに聞こえないかが気になって仕方なかった。手で受話口を覆って、声をひそめる。

「失礼ですが、奥様は——」

「あの子が6歳のとき、病気で亡くなりました。子宮がんで、手の施しようのないところまで進行していたんです。妻は我慢強い性格だったので、ギリギリまで痛みを訴えなかったのが仇になりました。気づいたときには、もうどうにもならなくて……」

こめかみから一筋の汗が流れるのを感じた。密かにチセを見やる。が、こちらの会話に気づいた様子もなく、部屋の隅でくつろいでいる。

ひとしきり話したあと、すみません話しすぎましたと、父親は謝った。

「日本語が達人な方でよかった。最初聞いたときは驚きましたが……。どうぞ、娘をよろしくお願いいたします」

「え？ あ、はい。もちろん」

ぼうつとしていたせいで、勢いで返事をしていた。後悔したときはすでに遅く、電話は切れていた。

「電話、終わりました？」

対角線の向こう側にいるチセが顔を上げた。

「お父さん、変なこと言ってますでしたか？　すごい心配性なんですよ」

「ひとり娘だつて……。そりゃ、心配もするだろう」

呑気な笑みを浮かべているチセに、ジェイルは言った。

「大事にしるよ」

きょとんとしたのち、「へへっ」と、チセは照れた。

iPhoneを机に置いて、ジェイルはしばらくパソコンの画面を眺めた。それから水を飲み、再びパソコンを操作しようとしたが、たまっている仕事は特になかった。

チセは黙って本を読んでいる。ジェイルの本棚から勝手に取り出したらしい、パオロ・バチガルピの『ねじまき少女』。近未来のタイを舞台にしたSF作品である。タイトルは、主人公が会った日本人少女型アンドロイドのことだ。

ジェイルの沈黙は10分ともたなかった。

「外、出るか」

チセがきょとんとした顔で見上げる。

「祭。行きたいんだろ」

情が移ったとか、気が変わったとか、そういうんじゃない。ジェイルは自分に言い聞かせる。ただ、余計な情報を聞かされて、部屋にこもっているのが鬱陶しくなっただけだ。

チセの笑顔を見る前に、ジェイルは大股で玄関へ向かった。

第8話：迷子

夏のバカンスシーズン、それも建国祭イベント中だけあって、街は観光客で盛大にこったがえしている。民主化して15年目という節目の年であることも、盛り上がりには拍車をかけているようだ。

あらゆる壁や街灯が、色とりどりの花とランタンで飾りつけられている。赤、青、黄、ピンク、オレンジ、紫……。原色の南国の花は、むせかえるように濃厚な匂いを放っている。ストリートには串焼き、麺類、餅、フルーツ、かき氷などの食べ物屋台や、伝統工芸の玩具、Tシャツやサンダル、アジアのアイドルグッズなどの屋台が切れ目なく並び、千手観音のようにほうぼうから客引きの手が伸びている。

そのあいだを縫うように、ジェイルは速足で歩く。

チセを連れてやって来たはいいが、これほどの人出だとは。屋台に興味がなく、花やランタンを愛でる趣味もないジェイルは、すでに来たことを後悔し始めている。

「メインストリートはもういいだろ。はやく、建物の中にでも――」
横を見ると、チセがいない。ジェイルと真反対に、屋台や出しものに興味津々なチセは、さっきからちよくちよく姿を消しては戻ってきていた。またかとジェイルは心の中で舌打ちして、人ごみに目を凝らした。

「こっちです」

シャツの裾を引っ張られる。振り返ると、怒りの表情の木彫りのお面が目の前にあった。

「わっ」

「へへ、驚きましたー？」

お面の向こう側から、チセのしてやったり顔が覗く。ジェイルはげんなりした。

「遊ぶな。どうしたんだそれ」

「魔除けの効力があるって聞いて。お土産に買いましたー」

木彫りの面は、ヴェイラの伝統的な民芸品のひとつである。だが、若い娘のお土産に向いているとはとても見えない。それをつけたり外したりしてきゃっきゃと楽しんでいるチセは、かなり変わっていると思う。

「あつ、あの屋台かわいい」

チセが指差した。麦わら帽をかぶった主人が番をする屋台には、サイコロ状にカットされたフルーツが串に刺さって、ずらりと並んでいる。違う色のフルーツを組み合わせて、目に鮮やかだ。

声をかける間もなく、チセは屋台に走って行く。付き合うのもバカバカしく、ジェイルはさっさと歩き始めた。

なんで、あんなに楽しそうなんだあいつは。

人の波をかき分けてずんずん歩きながら、ジェイルは思った。祭なんて、ただ暑くてうるさいだけではないか。冷房のきいた部屋で本でも読んでいたほうが、よほど快適だと思う。祭の楽しみ方などジェイルは知らない。

前方から、やんちゃそうな少年たちが広がって歩いてきた。混雑しているのに迷惑な奴らだとジェイルは思う。案の定、すれ違いざまに、端のひとりと肩がぶつかった。

「いてっ」

少年が大きな声をあげて振り返った。他の少年たちも顔を向ける。しかし、無言で振り返ったジェイルを直視するやいなや、彼らは「やべ」という表情を浮かべ、足早に去って行った。

「なんだよ……」

近頃の若者が失礼なのは万国共通なのだろうか。そう思うジェイルに、からかうようなチセの声が飛んでくる。

「今の子たち、超怖がってましたね！」

いつの間にかまた傍に戻って来ていたチセは、右手にフルーツ串、左手にタピオカジュースを握っていた。見るたびに違うものを持っている娘だ。

「ぶつかってきたのはあつちだ」

「だって、カタギには見えないですよ、その格好」

赤い柄シャツにチノパンツ、長い髪に不精髭。そして、変装用のサングラス。

「失礼な。俺は善良な市民だ」

「うそだ」。テキ屋の兄さんですよ」

テキ屋が何を差すのかわからなかったが、どうせロクな意味ではないだろうとジェイルは思った。帰ったらグーグルで検索をかけなければ。

広場に出ると、地図やガイドブックを手にした一団が、そろそろとバスに乗り込んでいくのが見えた。服装を見る限り、おそらく地方から首都にやって来たツアーだろう。冷房が壊れたようなバスに詰め込まれて、彼らは田舎から首都にやってくる。世間は夏休みだ。「俺は店でコーヒーでも飲んでるから、あとは勝手に——」

またチセがない。

わざわざ探すのも面倒なので、座って待つことにする。ジェイルは近くの屋台でペットボトルの水を買うと、木陰のベンチに腰掛けた。

ペットボトルで額を冷やす。冷たい水滴が肌の上を流れて気持ちがいい。

そのまま、しばらくそうしていた。家族連れ、カップル、自転車、外国人観光客。たくさんの人たちが、ジェイルの前を通り過ぎて行く。皆、夏らしい表情を浮かべている。

「平和だな」

ジェイルは独り言ちた。

政治がどうか、経済がどうか、国としての問題は山積みだが、街の人たちはそれらからずっと離れたところで暮らしている。彼らにとっては、目の前にあることのほうが余程大切なだろう。それはある意味で、健全な国の在り方だとジェイルは思う。

強い風が吹いて、サングラス越しに世界が揺れる。

目の端にチセの姿が映った。ジェイルは深く沈めていた身体を起こす。

チセは、また右手に何かを持っている。いや、引っ張っているといたほうが正しいか。土産物として持ち運ぶには、大きすぎるよな――。

「どうしたんだよそれは!？」

思わずジェイルは悲鳴をあげた。

チセが連れてきたもの、それは泣いている幼い男の子だった。

「……名前は？」

男の子はぐずぐずと涙をすすってばかりで、ジェイルの質問に答えようとしない。

「どこから来た？ 親は？ 年は？」

怒られているように感じたのか、男の子がワツと泣きだす。しゃがんだチセが、すかさず「だいじょうぶだよー」と頭をなでた。縮こまるように、男の子はチセにしがみついた。

「もー、そんな喋り方じゃ尋問ですよ。逃げた舎弟を追い詰めるヤクザじゃないんだから、もっとやさしく聞いてあげてください」

「いきなり迷子のガキを連れて来られたって、どうしていいかわかんねえよ」

チセがみつけたときには、男の子はストリートの隅でひとりで泣いていたらしい。周りにいた人を見回しても、皆知らないという顔をした。チセが声をかけると抱きついてきたので、一緒に親を探しながらここまで連れてきたのだという。

「迷子センターとかありますか？ 日本ではよくあるんですけど」

「少なくともこの周辺にはねえな。デパートならともかく」

子どもと同じ目線の高さから、チセがジェイルを見上げる。

「じゃ、警察？」

「ダメだ!!」

ジェイルは即答した。ただでさえこの風貌なのだ。サングラスを

かけたまま警察に行くのは厳しい。というより、職務質問されてもおかしくない。名前や素顔を見られるのは絶対に避けたい。

「それか、俺は近くで待ってるから、お前が連れて行け」

「私、ヴェイラ語喋れないのに？」

この案も却下だ。見ようによつては、チセも迷子だと思われかねない。パスポートがないことがばれると、面倒が起きる可能性もある。

「どーすんだよ……」

かといって、置き去りにしていくのはさすがに気が引ける。ジェイルはため息をついた。

縮こまったままの男の子をやさしくなでながら、チセが笑顔で訊いた。

「いっぱい泣いておなかすいたよね。何か食べる？ 何が好き？」

当然、日本語が通じるわけではないのだが、男の子はチセの目をじつとのぞきこんだ。チセは口の前で何かをつまんだ手の形をつくり、大きく顎を動かして「ハポー（美味しい）！」と言ってみせた。

どうやら、食べるジェスチャーをしているらしい。

「チャナム」

男の子がぼつりとつぶやいたのを、ジェイルは聞き逃さなかった。チャナムとは、南部地方の伝統的なお菓子の名前だ。

ジェイルは男の子のそばにしゃがみ込んで、サングラスを外して尋ねた。

「グナン？ ミコツク？ フーエン？」

ヴェイラ南部の都市名を思いつくままに挙げる。フーエンと言ったとき、男の子がうなずいた。

「お父さんやお母さんと、一緒に旅行に来たんだな？」

「うん」

知っている単語が出てきたことに安心したのか、一気に反応がよくなった。ジェイルの問いに、素直に答える。

「バスでか？」

「うん」

「色は何色だった？」

「あおとしろ」

ジェイルは思い出した。さっき見たバスは、まさに青と白の車体だった。あのバスに親が乗っていたのならば、出発してからまださほど時間は経っていない。速攻で追いかければ、間に合うかもしれない。

「次の行き先がわかるか？」

男の子は返事をするかわりに、ジェイルの向こう側を指差した。その先にあるものを見て、チセがつぶやく。

「あ、宮殿」

自分自身から血の気が引く音を、ジェイルは聞いた。

第9話：王の間

「嫌だ！ 行きたくない！ やっぱりダメだ！」

後部座席でわめくヒゲの男を、タクシーの運転手は怪訝な顔でバツクミラー越しに見やる。

「往生際悪いですよ。ミン君のためじゃないですか。ほら、もうすぐ宮殿に着きますよ」

チセがケラケラと笑った。ミンという名の男の子は、そんなやり取りをきょとんと見つめている。

ミンを保護した広場から宮殿までは、タクシーで15分ほどの距離だ。

「俺にとつては、世界で一番行きたくない場所なんだよ！ わざわざ素性がバレる場所に飛びこむなんて、自殺行為だ」

「自意識過剰ですつてば。観光客にまぎれちゃえばわかりませんよ。3人でいれば、家族連れに見えるかも……ほら？」

チセが真ん中に座っているミンを抱き寄せ、頬の横でピースサインを作った。

ジェイルは壮大にため息をつく。どう考えても、誘拐犯と子ども2人にしか見えない。

「とにかく、一刻も早く親を探して、みつけたらすぐ退散だ」

「えー、せつかくだから観光しましょうよ」

「バカ！ 何が楽しくて……」

言いかけて、ジェイルは口をつぐんだ。続く「わざわざ金を払って、元自宅を観光するんだ」という行為の虚しさは、きっと他人にはわからない。

タクシーの窓の外に視線を動かす。すでに宮殿の敷地内に入っており、青々とした自然が広がっていた。その奥に、日光を受けてきらきら光る建物が見える。白と金を基調とした、アジアと西洋の建築技術が折衷した荘厳な宮殿。19世紀初頭に第3代国王・レック

ス1世によつて建造され、ヴェイラ王国の栄華を内外に示した。
でもまさか、同じ名前の子孫に面子をつぶされることになるとは
な。

ジェイルは唇をそつと皮肉な形にゆがめた。

代金を投げるようにしてチケットカウンターを通過する。早速、
前庭にいくつかの団体客をみつけた。

「違うか？」

ひとつずつ確かめるが、どれもミンは首を横に振った。

「じゃあ次！」

早歩きで観光客たちを追い越し、宮殿本体の入り口に辿りつく。
獅子の像に挟まれた大きな扉をくぐった。

「わー、すごい」

チセが感嘆の声をもらした。目の前に、磨きあげられた大理石の
床が明るく輝いていた。壁には東南アジアに伝わる神話の絵が何枚
も飾られている。

「わざわざ見るような場所じゃねえよ」

ゆっくり見たがつているチセをジェイルは急かす。

「ただの廊下だ」

のろのろと固まって歩く観光客のあいだを縫って歩く。リタイア
した夫婦らしき欧米人カップルが、パンフレットを覗きながら「次
は何？」と英語で喋っていた。ジェイルは口に出さずに答えた。次
は、“エメラルドの間”だ。

角を曲がると、文字通りエメラルド色の装飾が壁に埋め込まれた
空間が現れる。

「えー、これ本当にエメラルドなんですか！？」

興奮したチセが聞いた。

「んな訳ないだろ。使われているのは翡翠だ。北西部の山間部で昔
はよく採れたらしいから」

「翡翠だって貴重じゃないですか。こんなに使うって贅沢ですねえ」

世界的に見ても、翡翠の産地は限られている。この部屋は、かつては王に謁見する客が待つために使われていたという。諸外国への権勢のアピールを狙っていたのだろう。

「宮殿なんてどこもそんなもんだろ。ミン、親はいたか？」

チセと一緒に翡翠に目を奪われていたミンは、慌てて周りを見回す。そして、小さく首を横に振った。それを合図にジェイルはまた大股で歩き出した。さっさと次にいかなければ時間がもつたいない。

「あつ……ミン君、大丈夫？」

チセの声にジェイルが振り返ると、ミンが膝を抱えてうずくまっていた。段差につまずいて転んだらしい。

「いたい」

またベソをかいてしまった。チセがミンの横にしゃがみながら訴える。

「ミン君、追いかけてようとして転んじやったんですよ。子どもだから、そんなにはやく歩いちゃだめです」

「んなこと言われても……」

反論しかけたジェイルだが、周囲の視線に気づいてハツとする。泣いている子どもとヒゲ面の男の組み合わせは、観光客としては不自然すぎる。あまり怪しまれるとマズい。

「俺が悪かった。頼むから泣くな」

ミンはこくりと頷いた。あまり喋らない子だから、確かに無理をさせていたのかもしれない。

「おんぶしてあげたらいいんじゃないですか？ 早く歩けるし、ミン君も親を探しやすいし、一石二鳥ですよ」

「おんぶ!？」

チセの提案に目を剥きそうになるが、ぐっところえてしゃがんだ。チセに促されて、背中にミンがよじ登る。慣れない重みと温もりを感じて、ジェイルは落ちつかない気持ちになる。なにしろ、生まれてこのかた32年間、誰かをおぶるなんて経験したことがない。

「よし、行くぞ」

ミンの涙が首筋に触れた感触がしたが、それは気にしないことにした。

矢印の観光ルートに添って、さまざまな部屋を通り過ぎる。その際、子どもに分かるような平易な言葉で解説してやると、ミンは喜んだ。

「ここは護衛たちの控えの間。宮殿はずっと守ってなきゃいけないだろ。時間が来ると交代するんだ」

「敵が来たらたかうの？」

「宮殿の奥まで敵が攻めてきたことはないらしいけどな。でも王様の命を狙う奴はいっぱいたから、気は抜けない」

チセは興味深そうに内装や展示を眺めながら、ふたりのあとをついてきている。まだミンの親はみつからない。

いよいよ、“王の間”の前に辿りついた。宮殿見学のクライマックス、宮殿内随一の広さと豪華さを誇る広間だ。ミンを背負う腕に力がこもった。

正直なところ、気が重い。

この広間が王制時代に公に使われたのは、父である先王の葬儀と翌日のジェイルの即位式が最後だったはずだ。ジェイルの最悪の思ひ出のひとつだった。

父の死因は急性心筋梗塞だった。高血圧の気があったとはいえ、50歳になる前に死なれるなど、幼いジェイルは想像もしていなかった。今思えば政治のストレスなどもあったのだろうが、その頃はただひたすら、「何故」という気持ちで渦巻いた。

心の準備があれば、まだ違ったのかもしれない。だが王太子とはいえ、13歳からヨーロッパの寄宿学校に留学し、正月と夏季休暇にしか母国に戻らない生活を送っていたジェイルにとって、突然課せられた重苦しい儀式の数々は現実感のないものだった。

帰国するなり、疲労と緊張でほとんど眠れないなか、訳も分からないまま公務をこなした。思い出すたび吐き気がする。あの日、広

間にずらりと並んだ、人人人。全員がジェイルを見ていた。憐れみ、憂慮、もしくは値踏みするような目で。

「だいじょうぶですか？」

唐突にチセの声が耳に入って、現実引き戻される。声のほうを見ると、チセは大きな目でじっとジェイルを見上げていた。

「いきなりばーっとしてどうしたんですか？」

「え？ いや……」

ジェイルが返答に詰まっていると、チセが思いついたように言った。

「あ、血糖値が下がったとか。そういえばお昼ごはん食べてないんじゃないですか？ 屋台の食べ物美味しかったのに、頑なに食べないようとしなないし」

ジェイルが反応する前に、チセはミンに話しかける。

「屋台の食べ物、ハポー（美味しい）だねー」

日本語に混じった「美味しい」というヴェイラ語を聞きとれたのが嬉しいのか、ミンが楽しそうに「はぽー！」と繰り返した。

「なのに、おじさんは頑固だねー」

「お、おじさん！？」

舌を出して逃げるチセを、思わず追いかけた。背中の上では、ミンもきやつきやと笑っている。

「ほらミン君、ここが王様の部屋だって。凄いねー！」

いつの間にか“王の間”に入っていたらしい。それに気づいて、一瞬、周囲のざわめきが消えたように感じた。ジェイルは目の前をに広がる光景を見渡した。そして、サングラスをそとずらして、裸眼でもう一度見回す。

あの日と同じく、大勢の人間がいた。だが、ジェイルを見ている人間は誰もいない。みんな、赤いビロードが張られた王座や、色とりどりの石が埋め込まれたシャンデリアや、黄金のクジャクのレリーフなどに目を奪われ、ため息をついている。ジェイルを見ている人間は誰もいない。

「秘密の小部屋とか隠されてそんな雰囲気ですねえ！」

無邪気に彼を見上げる、この少女以外は。

チセの言葉に、ジェイルはあることを思い出した。サングラスをかけ直して小声でミンにささやく。

「ミン、いいこと教えてやる。他の人には内緒だぞ」

ジェイルは王座の奥を指差した。

「あのクジャクのレリーフの中に、一匹だけ動くやつがいる。そいつをずらすと、秘密の抜け道が現れる。上の階の、王の執務室に繋がってるんだ」

嘘のような話だが、幼い頃妹と一緒に試したことがある。探険は成功したものの、狭くて暗いうえに埃っぽくて、夜に小児ぜんそくの発作が出た。それがきっかけで父親にばれて、ひどく怒られたのだ。

何故ずっと忘れていたのだろう。俺は、ここに住んでいたのに。

ミンが目を輝かせて「ほんと!？」と興奮した。ジェイルは人差し指を口にあて、「しーっ」というポーズを作った。

「なになに、何の話ですか？」

「お前には教えねえよ」

にべもなく即答すると、チセは「ずるーい」と口をとがらせる。

「国家機密だ」

サングラスの奥の瞳を細めて、ジェイルは笑った。

第10話：デモ隊

ミンの家族を含むツアーは、観光コースの出口近くでみつかった。「お祖父ちゃんたちのグループにいたんじゃないの!?　ここまてどうやって来たの!？」

目を丸くしながら、ミンの母親は幼い息子を抱き上げる。

「ひげのおじさんと、おねえちゃん」

ミンが今しがたふたりに送り出されたほうを指差した。だが柱の裏に隠れているジェイルとチセの姿が見えなかったらしく、母親は不思議そうな顔をする。その様子を、チセが陰からこっそりのぞく。「行っちゃいますよ」

「俺はいいって」

「すっかり懷いてたじゃないですか」

ジェイルがしぶしぶ顔を出すと、母親の腕に抱かれたミンがふたりに気づいて笑顔になり、小さい手を懸命に振った。その姿も人ごみにまぎれ、だんだんと見えなくなる。

「任務完了、ですね」

建物の出口を出ると、2階ほどの高さの広いテラスになっている。高い位置から街を見渡すことができるので、観光客が写真を撮ったり、双眼鏡で眺めるには絶好のスポットだ。

「人助けすると、気分がいいですねえ」

チセが背中を手すりに預けて、猫のように伸びをする。ジェイルは手すりの上で頬杖をつき、ぼやいた。

「みつかったからよかったものの……、あんまり余計なことに首を突っ込むなよ」

「それ、よく言われます」

チセはくりりと身体の向きを変え、眼下の景色を眺めた。

「『帯沢千星は素っ頓狂なことばかりする』って、21年間ずーつと言われてますねえ。特に学校の先生からすると問題児だったみた

いで、裏では“小型爆弾”って呼ばれてたらしいです。おかげでお父さんもしょっちゅう呼び出されてたし」

ジェイルの眉間にしわが寄る。

「ドラッグとかやってたのか？」

「まさか！」

チセは噴き出した。

「これでもミツシヨン系のお嬢様校でしだし、法に触れるようなことは全然。臨海学校の自由時間で無人島探索したりとか、選挙管理委員として生徒会長選挙をイベント化したりとか、そういうのです」「イベント？」

「堅苦しい選挙じゃつまないなと思って、ダンス部や調理部に協力してもらって、パーティーみたいにしたんです。楽しかったあ。反対されるのがわかってたので、基本的に先生へは事後報告でしたけどね。でも、悪いことしてるつもりはありません。生徒の評判も上々で、次の年から定例化されたんですよ。あ、中学生のとき、露出狂に遭ったのをとっ捕まえて警察に突き出したときは、『頼むから危ないことはしないでくれ』って、お父さんに泣かれちゃいましたけど」

けらけらと笑うチセの話を聞きながら、ジェイルは空を見上げてため息をついた。右往左往している大人たちの姿が容易に目に浮かぶ。電話越しでしか知らないチセの父親に同情したくなった。

だが次に聞こえたのは、予想外の言葉だった。

「私、いつも、明日死ぬんじゃないかって思ってたんですけどよ」
思わずジェイルは動きを止めた。

「形あるものはいつかなくなるし、時間は流れて、現在はあつという間に過去になっていく。当たり前のことなんてない。だから、私は目の前のことを見過ごしたくないんです」

チセの大きな瞳には、空と街の境目が映っていた。手すりにちょこんと寄りかかって夢みるように微笑む姿は、無防備な少女にしか見えない。しかし、その唇から紡がれるのは淡々とした言葉だった。

「今日会った人と、もう二度と会えないかもしれない。明日、死ぬのは私かもしれない」

それは、自分の母親のことを指しているのだろうか。

“あの子が6歳のとき、病気で亡くなりました”

今朝方の、チセの父親の言葉が脳裏をよぎる。ジェイルの微妙な表情の変化に気づいたのか、チセはジェイルを見上げた。

「お父さんに聞きました？ 母のこと」

「いや……」

なんと答えていいかわからないジェイルに、チセは目配せする。

「気にしないでください。ふふ、あの人すぐその話するんですよ。

周りから『あの子が変なのは、母親がいないからだ』ってよく言われたから、責任を感じてるみたいなんです」

でも、とつぶやく。

「確かに、因果関係はあるでしょうね。だけど母がいないのは私の人生でもう当然のことだし、それで同情されたり変な目で見られたりするの、腑に落ちなくて」

チセは静かに口角をあげた。

「生まれてくる環境は、誰にも選べないじゃないですか」

そんなことは知っている。それを繰り返し考え続けたのは、ほかならぬ自分だ。なのに、チセの言葉に予想以上に驚いている自分に、ジェイルは驚いていた。

サングラスの奥で瞳が乾く。まばたきすると、チセと目が合った。出会った夜にも感じたが、見る者をずっと引きこむような眼差しは、まるで動物のようだ。

そう思ったとき、チセがくしゃりと表情を崩した。

「だから自分で選べるものは、後悔しないようにしたいです」

そして、無邪気な笑顔を浮かべた。

ああ、この少女はきつと、ジェイル以外の誰にでも、同じように接するのだろう。相手の年齢も性別も出自も関係なく、高慢になることも、へつらうこともなく、ごく自然に、身軽に、まっすぐ目を

見て。

ジェイルは我知らず口に出していた。

「……変わってる」

「それも、よく言われます」

抜けるような青空の下、チセの明るい色の髪が、陽光に透けていた。

数日前まで見ず知らずだった外国人の少女と、15年ぶりにかつての我が家にいる。信じられないようでいて、同時に当たり前のような、不思議な心地がジェイルを満たした。

シュプレヒコールが聞こえてきたのは、そのときだった。

「ドルーダ首相は辞任せよ！」

「ヴェイラの誇りを取り戻せ！」

観光地におよそふさわしくない騒ぎに、テラスにいる観光客たちが顔を見合わせた。シュプレヒコールはだんだんと大きくなっていく。ジェイルは手すりから身を乗り出して下を覗いた。

プラカードや横断幕を持った人々が列をなして、宮殿前の広場を練り歩いてきていた。

「デモですね」

「見りゃわかる」

ジェイルは素早く目を動かす。ざっと見たところで数百人はいるだろうか。30〜50代くらいの男性が多いが、女性もいる。広場まではチケットなしで誰でも入れるので、デモ隊は宮殿のギリギリのところまで近づいてきていた。出入りする観光客が遠巻きにしてあけた道を、デモ隊が練り歩く姿は異様だ。

彼らが掲げるプラカードには「無能なドルーダ首相は退陣せよ」

「ヴェイラを守れ」といった言葉が踊っている。

「人望なき政権は去れ！」

「「そうだー！」」

広場から宮殿に向かって、デモ隊は拳を振り上げて叫ぶ。

宮殿の上階には、行政府が据えられている。それに向かって彼らは叫んでいるのだろうが、まるでテラスに立つ自分に向けられているような錯覚に陥って、ジェイルは手すりを握りしめた。

この光景を俺は知っている。

あの頃、ここで、何度も経験した――。

身動きが取れないジェイルの目に、上下するプラカードのひとつが飛び込んできた。

王政を復古せよ

膝の裏を蹴られたような気分だった。

「ああつ!？」

チセが素っ頓狂な声をあげた。それを合図に、ジェイルの強張りがほどける。

「なんだ、いきなり？」

「あの人！ ほら、あの黒いポロシャツの人です！」

シュプレヒコールと一緒に腕を突き上げている、若い男をチセは指差した。

「私のパスポート盗んだ人です」

「まさか……。似ているだけだろう」

チセはぶんぶんと首を横に振った。

「私、目がいいんです。間違いありません。あの人が左手にしてる水晶のブレスレット、私のです。というか、正確には母のです」

「どういうことだ？」

「パスポートと一緒にポーチに入れてたんです。いつも持ち歩いているお守り代わりというか、母の形見だったので」

ジェイルは目を見開いた。

「そんな大事なこと、なんではやく言わないんだよ!？」

「盗られたのは私の責任だし、あるとき追いかけても捕まらなかったから、そういう運命なのかなと思って……」

チセは息を吸った。

「でも、ここで出会ったってことは、取り戻せてことですね」

斜めかけバッグを肩から外すと、有無を言わずジェイルの腕に押し付けた。

「しばらく預かってもらえますか？ 行ってきます」

「待て、おい！」

ジェイルが静止するよりはやく、チセは駆けだしていた。周りの観光客が、大声を出したジェイルを何事かと見てくる。

「クソッ」

風体に似合わぬ水玉柄のバッグを掴んで、ジェイルも走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5824s/>

アフターキング

2011年9月21日03時19分発行